天理教 江南支部だより

発行先　江南支部
発行日　立教186年12月1日
発行責任者　福西　努
発行住所　甲賀町上野461番地9

12月号　NO281

教祖140年祭「ようぼく一斉活動日」を開催

教祖140年祭活動をめざす年祭活動を、同じ地域に住むようぼく一同が一手一つに勇み心を揃えて進めようとお打ち出し頂いた「ようぼく一斉活動日」の1回目が10月29日に開催された。この日、それぞれの支部で工夫を凝らした活動が一斉に展開された。

江南支部では、甲龍分教会を会場に開催。支部例会等で相談を重ね、まず「元の理」を学ぼうと西岡 洋先生を講師に招き、「元の理の素晴らしさを学んで」と題して、自身のこれまでの人生を振り返り、元の理に辿りつくまでをユーモアを交えながら話され、例えを用いて分かりやすく元の理をお話しくださった。当日の受講者は162名で、アンケートでは、素晴らしいお話だった、もっとお話を聞きたい、元の理を学びたいという意見が多く、好評の活動日となった。なお、活動日は5回開催の予定、次回の開催については後日発表。続いて受講することを促されている。

前日より係員一手一つに準備を進め、当日は青年会員や女子青年も大勢係員としてつとめて頂き、時間が近づくにつれ続々と受講生が詰めかけ、駐車場も満車となり、年祭へ向け勇み心を高める活動日となった。

朝の信仰読本

中山慶純著

〝しこり〟を残していませんか？

電車に乗っていたときのことです。座っている若者の目の前に、おばあさんがやって来ました。若者はすぐに立ち上がり、おばあさんに席を譲りました。「感心な子やなあ」と思った矢先、若者は「ちぇっ」と舌打ちをしたのです。おばあさんは「ありがとう」と言って座りましたが、その場の空気が重くなったのは、言うまでもありません。

新幹線に乗ったときも、似たようなことがありました。私の隣に座った人が、荷物を棚に載せず足元に置いたので、そばを通る人が、その荷物につまずいて転んでしまったのです。お互いに少し睨み合っただけで、大事には至りませんでしたが、周囲はハラハラしますし、その後も嫌な空気が漂っていました。

前者の若者は、善意から席を譲ったのに、最後に心ない態度を取ったせいで〝しこり〟を残しました。後者の二人も、どちらか一方から「ごめんなさい」のひと言が出ていたら、「いえ、こちらこそ」となり、当事者も周囲も、穏やかな気持ちでその場を過ごすことができたはずです。

自分たちだけでなく、周囲の人たちをも不快にさせ、しこりを残してしまう。これは、親神様、教祖が「残念」と思われる人間の姿です。そして、そう思われた時点で、幸せはスーッと遠のいていき、運命も落ちていきます。だから、自分は正しい通り方ができているか、親神様、教祖が「そうだよ、それでいいんだよ」と、うなずいてくださっているかどうか、常に考えながら行動したいものです。

お道の教えは、心がたすかる教えです。心がたすかるとは、自分のことではなく、人さまのたすかりを願えるということです。「どうしたら、どう言ったら、この人は喜んでくださるかな」ということだけを考えて行動していれば、それがじわじわと体と心に染み込んで、自然ときれいな言葉や行動が出てくるようになります。そうすると、運命も一気に変わっていくのです。

また、「病の元は心から」と教えていただきます。たとえば、がんは、小さな腫瘍が大きくなって、しこりができたりする病気です。そのしこりは、これまで人生を通ってきたなかで残してきた心のしこりが、形となって現れてきたものとも考えられます。

しこりをつくらないに越したことはありません。けれども、もしできてしまったら、なんとかそれを消す努力をして、親神様、教祖に「そうそう」とうなずいていただけるように、真実の心で通らせていただきましょう。

みんなの教理勉強

だめの教えって素晴らしい

飯田照明

だめ（究極）の教えの何とありがたいことか！

はじめて、人間の本性は善いということを明らかにされた

キリスト教では、人祖（じんそ）アダムとエバの罪（つみ）（原罪（げんざい））によって人間は罪に支配されるようになり、それが子から孫へ

と受けつがれ、人間の力ではどうしようもないと教えている。

教祖は、人間は、本質的に善きものであると教えられた。子供（人間）可愛い一条の親神さまが、悪いものを創られるはずはないし、悪いままでいつまでも放っておかれるはずがないからである。

しかし心のほこりを積むことで、もともと善いものが、悪くなることもある。心の成人が足らず、成人への努力が不足しているゆえの、悪しきものを、親神さまは身上（病気）や事情（トラブル）などで知らされ、もともとの善いものに戻るよう励まされるのである。

はじめて、運命の転換や人格向上の道を教えられた

人間には持って生まれた性質や癖性分がある。運命もある。いんねんもある。それは長い間生まれ更わりしてきた間に心に積んだほこりやいんねんが原因となっている。

仏教では、それは人間の力ではどうにもならない宿業であるから諦めるほかないという。

お道では人間がたえず努力することによって、いんねんも納消され、良いいんねんに転換できると教えられている。身辺に起こる全てのことは、親神さまがたすけてやりたいという親心からのお知らせであると悟り、心の掃除と心の成人に努力するとき、悪い運命はよい運命に転換するし、人格はさらに向上し、精神性も高まって、人間として最も素晴らしい状態に立て替わっていく。人間の完成と運命転換のたしかな道を教えられたのである。

はじめて、教祖がじきじきにおつとめを教えられた

世界のどの宗教にも、それぞれ独自の儀礼や儀式があり、お祭りがある。

長い伝統を持つ宗教の場合、時間をかけて洗練され、荘厳な雰囲気をかもし出す、壮麗で厳粛な儀式が行われ、崇高な感情を湧き上がらせる。

しかしそれらはいずれも宗祖とは無関係に、後の世の信者たちが営々と作り上げていったのである。

イエス・キリストがもしこの世に現れて、世界各地で行われているキリスト教の教会の礼拝や祭儀を見たら、どう思われるだろう。しかも各派ごとに違うのを見られたら。お釈迦さまの場合も同じである。

おつとめは、教祖が御自ら、教えられたものである。これも他に例がない。

他宗と根本的に違うのは、おつとめは、人間と世界の創造の守護を、今もこれからも末代にわたっていただくためのものである。どの宗教にもない、尊くありがたいつとめである。

本年の災救隊訓練が高島グリーンパーク思い出の森で開催。支部より3名が参加、周辺の伐採、下草刈りを行った。

少年会滋賀教区団が総会を開催

10月28日、少年会教区団が、水口大教会を会場に本年度のおつとめ総会を開催した。江南支部は座りづとめを担当、この日を目指し、練習を重ねた少年会員は真剣に、大人顔負けのおつとめをつとめた。

支部婦人会が成人の集いを開催

11月12日、支部婦人会は、龍池分教会を会場に「成人の集い」を開催した。参加人数は、婦人会員49名、少年会員4名であった。

中西はつよ教区主任の講話の後、会員の代表が感話を行い、その後、練りあいの時間がもたれ、年祭に向け心を揃え勇んで歩みを進める決意を新たにした。

教区・支部情報ネットにつながります。
支部だより、行事案内などがご覧いただけます。